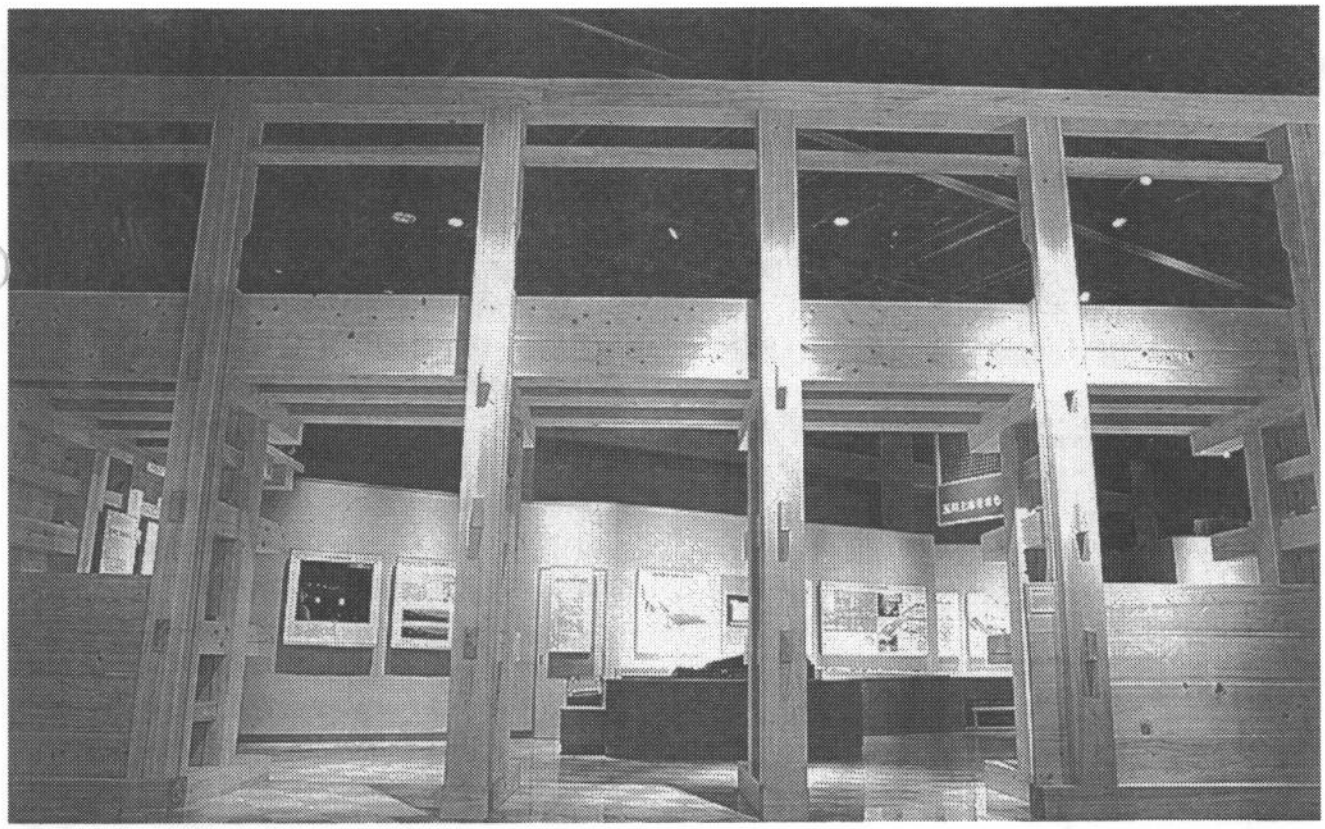
東京都三多摩公立博物館協議会報
ミュージアム多摩
No.19
発　行
1998年3月31日



「羽村市郷土博物館リニューアルオープン」

おもしろい博物館をめざして

—イギリス・アメリカにおける博物館の取り組み—

東京都教育庁生涯学習部文化課
原　眞麻子

早いもので、アメリカ・シカゴの−20℃という極寒の地をあとにしてから2度めの冬が来てしまいました。私が博物館教育をテーマに東京都職員海外研修でイギリス・アメリカを訪れたのは、平成7年の秋から冬にかけての3カ月間でしたから、今回ご紹介するには、決して最新の情報ではなく、少々申し訳ないように思います。しかしながら、最近の展示評価をとりいれた展示開発システムは欧米ではますます盛んになっており、その実例を紹介したものはあまり多くないように思われます。私の報告がお役にたてばと思い、ここに紹介します。

多くの、というよりほとんどすべての博物館は、おもしろい博物館にしたいと願っています。十分な予算もないながら、多忙を極め、アイデアをしぼって作った展示なのになぜか人が入らない。来館者数で展示を評価するのはナンセンスだと考えながら、来館者数はやはり人気のバロメータになることは否定できません。より学術的あるいは教育的に評価の高い展示と、通俗的に人気のある展示とのギャップをどう埋めるかは欧米の博物館でも共通の課題です。欧米の博物館では、学術的評価も高く、人気も高い展示をめざしてさまざまな取り組みがなされています。

現地で目のあたりにしたことは、博物館の役

割を考え、展示の機能と技術特性を的確に捉え、来館者のニーズにあわせた企画展開といったまさにミュージアム・マネージメントの実態でした。ここでは昨今日本でも話題になっている展示評価についてその概略に触れながら、実際にはどのようなスタッフがどのようなシステムで展示を開発しているか、インタビューした結果を紹介します。

1．展示開発における３つの評価

博物館の展示評価法については、欧米では来館者研究 Visitor Studiesの進展とともに1980年代から広く研究され、試みられています。ロジャー・マイルズ（1984）は、展示評価についてその適用する展示開発の段階の順にしたがって以下のように分類しています。

(1) 初期評価 front-end evaluation　展示開発以前に実施する。来館者の潜在的なニーズや展示テーマに関する知識程度を調査し、評価する。

(2) 制作時評価 formative evaluation　展示制作中に実施する。展示模型をはじめとする展示試作の評価を行う。

(3) 総括評価 summative evaluation　展示開設後に行う。来館者の理解度、満足度を調査し評価する。

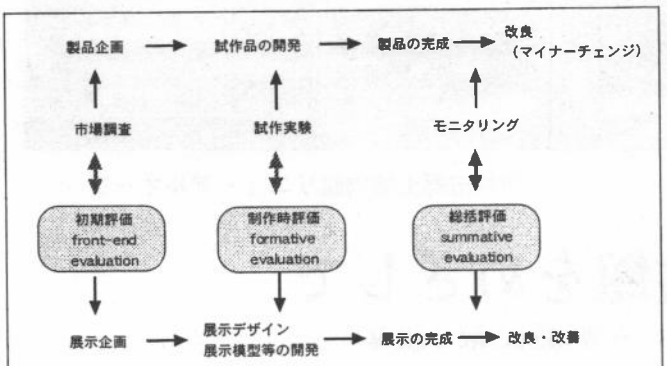


図１　自動車開発と展示開発

これらを自動車の製作工程になぞらえて考えてみますと、図１のようになります。展示開発の工程が、市場調査を導入したまさにマーケティングであることがわかります。それではどのような組織、スタッフで進めているのでしょうか。また、評価は展示開発の工程で具体的にどのように関わってきているのでしょうか。

2．展示開発の事例

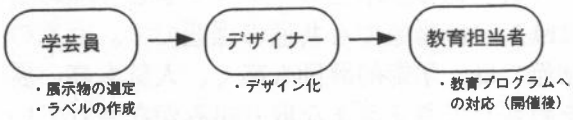


図２　従来の方法

①大英自然史博物館

展示開発のシステムは、大英自然史博物館の場合、以前は図２に示すように学芸員が展示したいモノを選ぶことから始まり、その展示物を解説するラベルの作成も学芸員の手に委ねられていました。デザイナーはこれを受け、展示をより見やすくあるいは美しく陳列するためのデザインを作り、最後にできあがった展示プランを見て教育担当者が教育プログラムを企画していました。この方法については、日本でも多くの博物館がこの手法をとっていることだろうと思われます。

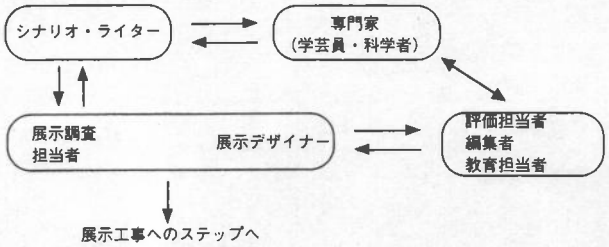


図３　大英自然史博物館の展示開発システム

最近は、図３に示すようにまず、シナリオ・ライターが学芸員や外部専門家の助言を得ながら、展示テーマを企画します。次に評価担当者が展示テーマについて来館者のニーズや理解度を調べ（初期評価）、この評価結果を踏まえ、シナリオ・ライターが学芸員等と相談しながら、展示シナリオや展示内容を決めます。この展示シナリオは、デザイナーに送られ、これを基に展示デザインなどを設計する過程では、学校の教育カリキュラムとの整合性を教育担当者がチェックし、内容のレベルを評価担当者がチェックします。また、展示内の解説文は、編集担当者がチェックします（制作時評価）。これらの過程を経て、さらに細部の展示設計や製作過程へと進んでいきます。

②アメリカ自然史博物館

ニューヨークのアメリカ自然史博物館の「人間生物学と進化」展では（図４）、まず最初に評価担当者による来館者ニーズ調査（初期評価）から始まっています。来館者の関心の高いものの中から展示テーマが決定され、学芸員が展示シナリオを作成します。ここから先は、開発スケジュールから予算管理を含め、展示開発プロジェクトの全責任が展示開発担当者に委ねられます。この展示開発担当者の下、デザイナー、教育担当者、編集者が一つのチームを作り、展示開発にあたります。もちろん展示開発担当者は必要

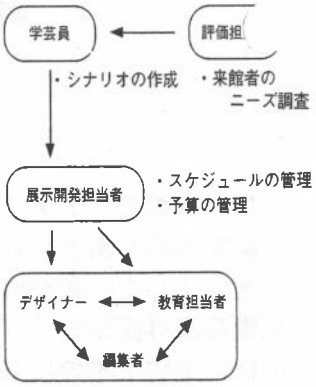


図４　アメリカ自然史博物館の展示開発システム

に応じて学芸員や評価担当者の助言（制作時評価）を得ています。

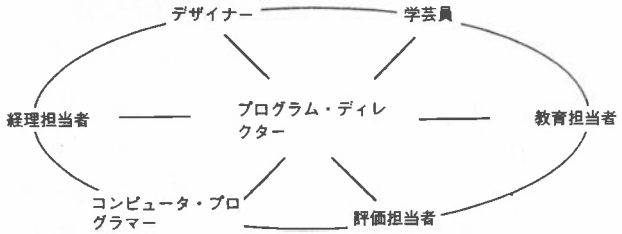


図5 フィールド自然史博物館の展示開発システム

③フィールド自然史博物館

シカゴのフィールド自然史博物館の場合は、図5のようにプログラム・ディレクターが展示開発にあたってのすべての権限をもっています。1つの展示開発プロジェクトチームには、このディレクターのもとに学芸員、教育担当者、評価担当者、コンピュータ・プログラマー、デザイナー及び経理担当者がおり、チーム会議においてすべてが決定されていきます。チームメンバーの下にはさらに多くのスタッフがおり、組織は枝葉のように広がっています。

このようにプログラム・ディレクターに全権が委任されているのには、この博物館の歴史的な背景がありました。この博物館では、以前は大英自然史博物館と同様に図2に示すようなシステムで展示を開発してきました。これをより来館者のニーズに合わせた展示に変えるため、十数年ほど前に有名なボストン子ども博物館館長であったスポック博士が副館長に招聘されました。従来の方法を通してきた博物館のスタッフにとっては、もちろん大変な改革を迫られたことになり、その改革の遂行は、困難を極めたと伝えられています。そこでできあがったのがこのシステムであり、スポック博士に全権を委任して、館の運営改革をも成し遂げたのです。現在は、スポック博士は博物館を去り、残されたプログラム・ディレクターは3名おり、それぞれが新しい展示プログラムを抱え、取り組んでいます。

3．評価がめざすもの

初期評価は、まず自分たちの博物館を取り巻く現状を把握することから始まっています。来館者は博物館に何を求めているのか、あるいは来館者が抱えている潜在的な興味、関心や問題意識を調査し、そこに博物館に対する新たなニーズを見い出そうとしているのです。

制作時評価は、展示技術のための評価といってもよいでしょう。展示試作品を作り、積極的に来館者に見せ、使いやすさ、わかりやすさや耐久度を調べます。カリフォルニアのエクスプロラトリウムでは、展示室の片隅にプロトタイプが置かれ、そのそばに簡単なアンケートを置き、来館者に評価を依頼していました。展示は的確に情報を伝えているか、誰にでも簡単に操作できるかなどを探っているのです。

実際に展示がオープンした後の総括評価については、予算が残らずなかなか実施できない実態にあると多くの担当者から聞きました。どこの博物館もこの総括評価と展示オープン後の改善費用に展示開発全予算の5～20％（ちなみにスミソニアン自然史博物館は20％）をプールしているそうですが、開発を進めていくうちに予想外に資金が必要になったり、改善費が高くついたりで、総括評価のための予算が残らないのだそうです。

評価を実施する目的は、来館者のニーズを知り、博物館の現状を認識し、博物館の事業をより効果的にすることにあります。特にアメリカにおいては、博物館の運営はほとんどが非営利団体によって行われているため、より広範な資金援助を得るためにも社会に役立つ博物館事業であらねばなりません。また評価そのものが次の出資者を募るための大切な資料となるのです。そのためにも評価は、展示開発になくてはならないシステムとなっています。

評価は、一次的には展示について実施することになりますが、その結果は展示の改良だけに活かすのではなく、それを補うワークショップの企画やあるいはミュージアムグッズに反映させるなど博物館事業全般に活かしていました。より有効な評価を行う前提には、博物館がどのような理念の下、展示で何を伝えようとするのかを明確にすることが不可欠であると思われました。

最後に、ここで紹介した展示開発に登場するスタッフの多くは、博物館の専属の職員です。しかし、評価に関するスタッフについては、まだ専属にかかえているところは少なく、調査会社に委託している場合が多く、時には教育担当者がボランティアを使って実施しているところがありました。日本の博物館がすぐさま専門スタッフをそろえた組織をもつようなことは不可能だと思いますが、評価を取り入れた展示開発システムの導入は、遠い未来の話ではないでしょう。紙面が限られていますので、総括評価報告書の事例までは紹介できませんでしたが、また機会を見つけてご紹介したいと思っています。博物館がよりおもしろく、活気にみちた場所となることを願ってやみません。

燻蒸剤・臭化メチルの使用規制と博物館・美術館等における防虫防黴対策の今後

東京国立文化財研究所
木 川 り か

1．オゾン層の保護と燻蒸剤・臭化メチルの規制

文化剤の虫や黴などによる生物被害は全国いずれの場所においても起こり、またその進行は著しく速いため、生物被害の防除は極めて重要な問題である。臭化メチルはそのすぐれた殺虫力、浸透性などの特徴からこれまで文化財に虫害が発生した場合、燻蒸剤として広範囲に用いられてきた。特に、わが国の文化財の分野では、効果的に殺虫・殺黴が行える臭化メチルと酸化エチレンの混合ガス（商品名エキボン）による燻蒸が積極的に推奨されてきたため、美術館・博物館・文書館等では作品の新規受け入れ時はもちろん、毎年、あるいは隔年ごとに収蔵品の定期燻蒸を行っている施設が極めて多い状況である。

ところが、臭化メチルはオゾン層を破壊する物質のひとつとして挙げられ、今後臭化メチルの生産・消費の全廃を図っていくことが世界的な課題となっている。そして、このほど1997年９月にモントリオールで行われた第９回モントリオール議定書締約国会議において臭化メチルの全廃時期が2005年に前倒しになることが決まった。すなわち、先進国では検疫および出荷前の処理用途など一部の用途を除いては、臭化メチルの生産および消費量を1999年までに1991年の基準値レベルの25％削減、2001年までに50％削減、2003年までに70％削減、2005年に全廃することで合意された。

わが国における臭化メチルの使用量は、1995年の統計では土壌燻蒸がもっとも多く（約70％）、検疫用がこれに次ぐ（約28％）。検疫用は規制の適応除外であり、農業分野の土壌燻蒸など一部の用途については、臭化メチルの不可欠用途（Critical Methyl Bromide Use, CMBU）として、代替策が実用化されるまで臭化メチルの全廃時期が延期される計画もある。ただし、CMBUに登録されるには厳しい基準が設けられている。わが国の文化財燻蒸に使用される臭化メチルの量は約１％程度であり、文化財用途にもこの基準が適用される可能性はある。しかし、仮にCMBUに登録されたとしても、いずれは全廃するわけであり、今後早急に対策を整備していく必要があることに変わりはない。

2．代替策についての考え方

2005年を目前にして、臭化メチル燻蒸（あるいはエキボン燻蒸）に完全にとってかわる方法は世界的にみてもない。今後、早急に対策を整備していく必要があるが、完全な代替薬剤がない以上、今後いろいろな方法を使い分けていくしかなく、文化財の害虫対策も根本的な変革を迫られている時期にきている。このような状況のなか、最近の世界的な害虫対策の潮流として、臭化メチルによる燻蒸のような化学的防除だけに頼るのではなく、最初に徹底的な予防体制を整えたうえで、害虫の生態をうまく利用した生態的防除や物理的防除をも取り入れ、適宜有効な防除手段を併用していくようになってきている。すなわち、総合防除管理（Integrated Pest Management）（ＩＰＭ）という考え方の一環として、大規模燻蒸をルーチンワークとして繰り返してきたやり方から、害虫に対する知識を活用してきめの細かい対応を行うやり方に変化してきているといえる。その中では、害虫の侵入経路の遮断はもちろん、きめの細やかな清掃が最も重要な項目であり、また虫害の発見のために、定期的にモニタリングを行う。さらに、害が発見されたときには、バイケンなど他の薬剤による燻蒸のほかにも、脱酸素法、温度処理法、ピレスロイドなど、材質や規模に応じて対応策を使いわけるというものである。

代替策の詳細については、他稿に譲るが、ひとつ言えることは、燻蒸は殺虫（殺黴）処置なのであって、防虫（防黴）効果はない、ということである。この特性をよく理解したうえで、新規受け入れ資料等について上手に個別燻蒸を活用し、日常の管理をしていれば、収蔵庫燻蒸は必ずしも必要がないケースはかなりある。しかし、問題は予算である。すなわち、前年度実績を受けて予算措置が行われるため、燻蒸をやめたら２度と予算がつかなくなることを危惧するあまり、被害がなくても燻蒸をする施設は、実は非常に多いのではなかろうか。このような燻蒸予算を今後は総合的な防虫防黴予算として運用することができれば、きわめて実りのあることである。今後は、資料や規模に応じた害虫・黴対策の使い分けを早急に整備するとともに、各施設に資料管理の知識のみならず正確な害虫・黴対策の知識を持った保存担当者が設置されることが何よりも重要である。

三博協平成９年度第１回協議会協議事項報告

博物館及び資料の消毒・燻蒸についてのアンケート結果より

１．建物自体の燻蒸ないし消毒実施と資料の燻蒸ないし消毒実施についての回答から

実施			中断	未実施
エキボン・臭化メチル	ブンガノンガス	その他		
１７館（63.0%）	６館（22.2%）	４館（14.8%）	１館（3.7%）	１館（3.7%）

※ アンケート対象施設館数は27館。ただし臭化メチル系とブンガノンガスの重複実施が２館あった。
※ なお、上記表の実施内容は、建物・資料の別を問わず合計した。％表示は27館に対しての数値である。

館　名（施設名）	燻　蒸・消　毒　の　実　施　内　容
東村山ふるさと歴史館	収蔵庫・展示室をブンガノンガス（商品名）による燻蒸。資料は荷受け室でビニール被覆し、エキボンによる燻蒸をしている。
旧武藤家住宅主屋	かまどでの焚火
八王子市郷土資料館	住宅密集化が進み、昭和61年以降ガス燻蒸は中断している。
府中市郷土の森博物館	収蔵庫・展示室と園内復元建物をエキボンによる燻蒸（不定期）、資料は燻蒸設備でエキボンを使用し適宜
町田市立博物館	全館をエキボンによる燻蒸、施設を２分し毎年半分ずつ実施
青梅市郷土博物館	収蔵庫他をエキボンによる燻蒸、年１回
調布市郷土博物館	収蔵庫はエキボン、展示室は臭化メチル、事務室その他はブンガノンガスによる燻蒸２回
瑞穂町郷土資料館	収蔵庫・展示室を臭化メチルによる燻蒸
奥多摩郷土資料館	フェトロチオン・ＤＤＶＰを散布（年２回）、資料はメチルブロマイトガスによる燻蒸年２回
福生市郷土資料室	図書館に併設のため収蔵庫のみブンガノンガスによる燻蒸
武蔵村山市立歴史民俗資料館	収蔵庫と整理室は年１回、全館は５年に１回エキボンによる燻蒸
あきる野市五日市郷土館	全館ブンガノンガスによる燻蒸、年２回（室内全域には空間噴霧、資料には高圧直接噴霧）
羽村市郷土博物館	ブンガノンガスによる燻蒸、年３回（１回目全館／２回目収蔵庫と展示室／３回目収蔵庫）
清瀬市郷土博物館	収蔵庫を臭化メチルによる燻蒸
立川市歴史民俗資料館	収蔵庫はエキボン、展示室は臭化メチルによる燻蒸、本館新館に分け１年交代
檜原村郷土資料館	収蔵庫はエキボン、展示室は臭化メチルによる燻蒸、年１回
日野市ふるさと博物館	収蔵庫・展示室をエキボンによる燻蒸３年に１度、資料は燻蒸設備でエキボンを使用し適宜
小金井市文化財センター	周辺への影響と顕著な虫害が認められないため実施していない
くにたち郷土文化館	収蔵庫はエキボンによる燻蒸年１回、その他は害虫駆除
東大和市立郷土博物館	収蔵庫はエキボンによる燻蒸
生活文化財保存庫	プレハブ棟をビニール被覆しエキボンによる燻蒸
東京農工大工学部付属博物館	適宜バルサンを噴霧
東京都高尾自然科学博物館	動植物系収蔵庫・動物資料展示室コーナーをエキボンによる燻蒸１回
東京都井の頭自然文化園	収蔵庫をエキボンによる燻蒸１～３年に１回
江戸東京たてもの園	毎年数棟をビニール被覆しエキボンによる燻蒸、湿気の多い箇所がキシラモンを追加投薬して実施
たましん歴史・美術館	所在するビル全体の害虫駆除年２回、資料は絵画中心で汚損の懸念があり実施しない
御岳美術館	害虫駆除年２回と一部防黴処置、資料は絵画中心で汚損の懸念があり実施しない

２．資料の燻蒸施設の有無の回答について

専用の燻蒸施設を保有する館は、「府中市郷土の森博物館」「日野市ふるさと博物館」の２館のみである。他は建物・資料を問わず業者委託で実施している。

３．周辺の環境と燻蒸を実施するにあたっての問題点

虫や黴の発生頻度、また燻蒸の実施方法はともに周辺環境との関わりが密接で、今回のアンケートからは次の二通りの方向性が読み取れた。

① 周辺に自然が多く残る場合

虫や黴の発生頻度が高く、これらによる害が懸念される。

② 住宅などが隣接する場合

住宅などが隣接する施設に対して注意を要する館は、解答27館中11施設。これに対して「問題無し」の解答は１施設に留まっている。各館の立地を考えると注意を要する施設はさらに増えると思われる。

また注意を要するとした館は、それぞれ人の集まり具合や住宅密集の度合いにより対応に差が生じている。

企画展『日野の鍛冶屋』の開催

日野市ふるさと博物館

日野市ふるさと博物館では平成９年７月４日から８月31日までの期間で、平成９年度企画展『日野の鍛冶屋～受け継がれた鉄の技術～』を開催した。日野市内の鍛冶屋は時代の流れと共に徐々に姿を消して行き、現在は１軒のみが仕事を続けている。本展はそうした日野市内の鍛冶屋の仕事を、主として技術的な側面から紹介するものであった。展示は市内からの寄贈・借用資料を中心に次の４つのコーナーで構成した。

① 暮らしの中の鍛冶屋：市内の鍛冶屋が製作した様々な鉄製品を展示し、鍛冶屋の仕事の多様さを紹介した。

② 道具と仕事場（写直）：鍛冶屋の仕事場を再現し、各種の道具の使用方法を紹介した。

③ 鉄を打つ：鍬や包丁の製作工程を、実物と写真により紹介した。

④ 鍛冶屋の信仰：金山神への奉納物などを展示し、鍛冶屋特有の信仰を紹介した。

また本展では、市内に現役の鍛冶屋が存在するという利点を生かし、敢えて講演会を行わず、関連行事として『鍛冶屋さんの仕事場をたずねて』と題する体験学習を全４回行った。これは市内の鍛冶屋を訪れ、仕事の様子を見学した上で実際に自分たちで鉄製品（鋏など）を作ってみるというもので、小学生からご高齢の方までが多数参加され、ご好評をいただいた。

末筆ながら本展の開催にご協力くださった皆様に改めて謝意を表したい。

『多摩文学紀行』と『多摩民具事典』の刊行

（財）たましん地域文化財団

当財団では出版を通じて地域文化に貢献することを目的に、平成３年度より「多摩郷土文庫」、「多摩歴史叢書」として７冊を刊行してきました。そして平成９年度は装いを新たにして、山本貴夫著『多摩文学紀行』と小川直之・後藤廣史・佐藤広・増田昭子・関東民具研究会編著『多摩民具事典』の２冊を刊行しました。

『多摩文学紀行』は、多摩を舞台にした作品や、そこで生まれ、育ち、在住した文学者たちの足跡を、その地域の歴史と風土とを関連させながら訪ね歩いたものです。取り上げた作家、作品は、国木田独歩、田山花袋、中里介山、太宰治などの名作をはじめ、大岡昇平、松本清張、三島由紀夫に触れ、村上龍、高橋三千綱、三田誠広、山田詠美などに及びます。

著者の山本貴夫氏は、三鷹で太宰治研究会を長らく主宰してこられましたが、著者独自の文学観が縦横無尽に語られ、興味は尽きません。

一方、『多摩民具事典』は昭和30年代の高度経済成長期を境に姿を消した多摩地域の民具とそれにかかわる伝承技術から169項目を選び、さらに他地域との比較や、関東地方や全国のなかでの位置づけを行った22項目を加え、全体では191項目となっています。見開き２頁を１項目として、適宜興味のある項目から読めるようになっています。

執筆陣は関東民具研究会会員や地域の研究者など総勢95名で、編集委員になっていただいた小川直之、後藤廣史、佐藤広、増田昭子各氏の足かけ４年に及ぶ御尽力によって完成しました。

『多摩文学紀行』四六判312頁、本体1,500円
『多摩民具事典』Ａ５判400頁、本体2,500円
発行　たましん地域文化財団
発売　けやき出版

植物画の魅力

東大和市立郷土博物館

当館では、毎年秋に企画展示「野草スケッチ展」を開催しています。これは、博物館講座「植物画教室」講師と講座受講者のみなさんの作品展です。

植物画は、科学的な視点と芸術的な視点から描かれるものです。植物図鑑に見られるような、正確な絵でありながら、なおかつ、額にいれて部屋に飾りたくなるようなものと言えるでしょう。イギリスの美術家ブラントは、著書「植物画の歴史」の中で、「植物画の目的は、花を紹介し、見る目を養うため、植物学を志す学生に知識を教授するため、あるいは人々に喜びをもたらすためである。」と書いています。

ところで、東大和市では1972（昭和47）年から「野草教室」をはじめました。現在は博物館の自然観察会「野草教室」として行われ、昨年25周年を迎えました。「野草教室」では、植物の観察とスケッチを中心に行っていました。そして、植物画をもっと専門に描きたい方のために、1995（平成７）年から博物館講座「植物画教室」をはじめました。初級・中級と二つにわけて開催しています。また一昨年には、講座終了後、自主グループ「植物画クラブ」も誕生し、公民館で活動しています。

今後も、植物画の魅力を広め、身近な自然に目を向けてもらえるよう「野草スケッチ展」「野草教室」「植物画教室」を継続していきたいと思います。

野草スケッチ展のようす

小金井市文化財センター

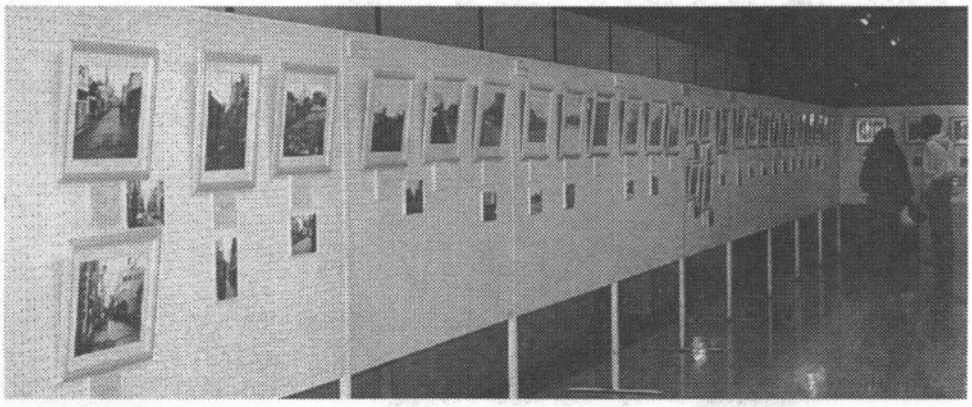
○季節展「名勝小金井桜」(4/1～5/5)：収蔵品の錦絵・紀行文・古写真・絵葉書・文献等により名勝小金井の歴史や桜文化を解説展示した。毎年花期に開催している。

○企画展「変わりゆく風景―高度成長期の小金井」(8/1～10/12)：風景の都市化を主題に昭和30～40年代の市内の風景写真(モノクロ)80点と現在の写真（カラー）とを対比した。

○企画展「縄文時代の貫井遺跡」(1/15～3/1予定)：過去20数次に及ぶ貫井遺跡の発掘調査で出土した多数の土器や石器により縄文時代中期の村の生活や文化に触れる。

平成10年度予定

○企画展(仮)「小金井小次郎と三宅島」(10～11月)：幕末～明治維新にかけて活躍した地元の侠客小金井小次郎に焦点ををあて、時代背景や人物像、配流先の三宅島での事績を展示する。また、三宅村との友好20周年を記念して、三宅島の文化財もあわせて紹介する予定。



郷土食づくり

東村山ふるさと歴史館

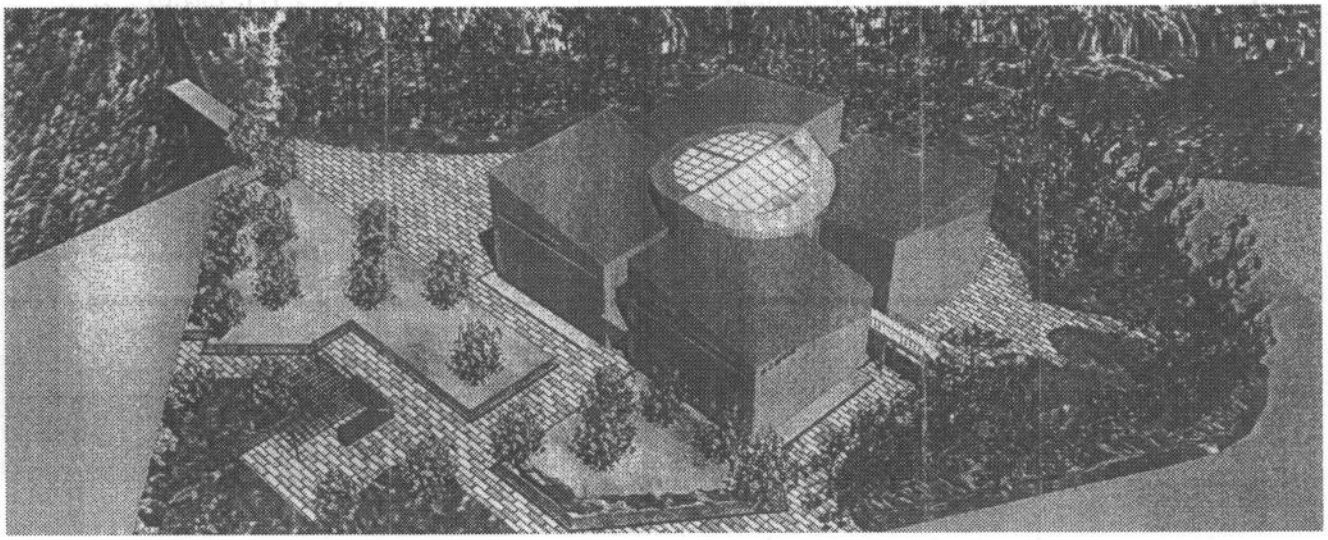
平成８年度は、11月に開館したということを口実にしていますが、本当にろくな事業もできずに終わってしまったという反省の年でした。が、今年も半年以上が過ぎて、振り返ると同じような反省。ただ唯一定着したのがこの題名にある「郷土食づくり」でした。この事業は、東村山が小麦をつくる畑作地域で、特に「うどん」や「ゆでまんじゅう」といったものが各家庭でつくられたということから設定されたものです。特に館側の当初の思惑とは裏腹に「ゆでまんじゅう」の人気は申込み開始10分で一杯となってしまうものです。これは１回の定員が20名という少数であることが原因なのでしょうが、多くの回数を行う事でやりくりしています。特にこの企画は、地元の主婦ボランティアの方々に支えられたおかげで歴史館の負担は最少限度で、隔月の事業がスムーズにすすんでいます。

さて、これで味をしめている歴史館としては他にもボランティア参加の事業はないものかと色々模索しているわけですが、（秋ごろ電話でアンケートさせていただきました。あの時はありがとうございました。）公募をしてボランティアを受け入れる博物館の力量はまだ、我ふるさと歴史館にはなく、いつかを夢見ている次第です。ただ職員だけの対応には限界もあり、行政改革の嵐が吹きまくる昨今では講師謝礼もままならず、ひたすら市民の手を。この考え方には問題ありですが、「市民とつくってゆく博物館」「開かれた博物館」の理想は忘れたくないと肝に命じております。

奥多摩郷土資料館の休館について

現在、奥多摩町では、奥多摩郷土資料館を取り壊し、その跡地に東京都水道局と共同で新しい施設「奥多摩　水と緑のふれあい館」の建設事業を進めております。このため平成９年６月１日より平成10年11月頃まで当館は休館いたします。

新しい施設の完成は、平成10年11月を予定しております。



甲野勇資料の整理を通して想うこと

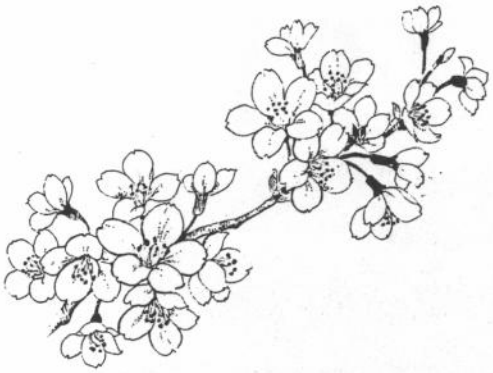
くにたち郷土文化館

当館では今年度末の1998（平成10）年２月７日から３月29日の期間に、企画展「甲野勇の軌跡」を開催します。

縄文時代の研究者として著名な甲野勇氏は、戦後まもない1946（昭和21）年に国立に居を構え、御逝去されるまでの21年間を多摩地域の地域史研究、青少年の育成活動などに力を注ぎました。

具体的には武蔵野郷土館に代表される博物館建設を挙げることができます。氏は戦前・戦中の皇国史観的歴史教育がもたらした被害の甚大さを顧み、国民が正しい歴史観・歴史認識を得るためには、中央集権的歴史観に固執するのではなく、各地域の歴史、とりわけ民衆の生活史を解き明かし、博物館において自ら見て触れて実感することが必要であることを文章の中で述べています。実際の展示でも、ありふれた土器の陳列をするのではなく、テーマを絞った展示、地域に根ざした展示を行いました。また、実際に石器を作ったり、火を起こさせたりするなど青少年対象の体験学習的教育普及活動や、中高生への発掘指導を積極的に行ないました。

高度経済成長、バブル経済を経て、全国的な現象として、市町村博物館の建設が増加しました。しかし、バブルの崩壊による極限的不況によって、右に習え的運営の博物館は淘汰される時期が来ています。今こそ先人の想いを顧みてそれぞれが独自の観点で、地域の個性を活かした活動を展開してゆきたいものです。



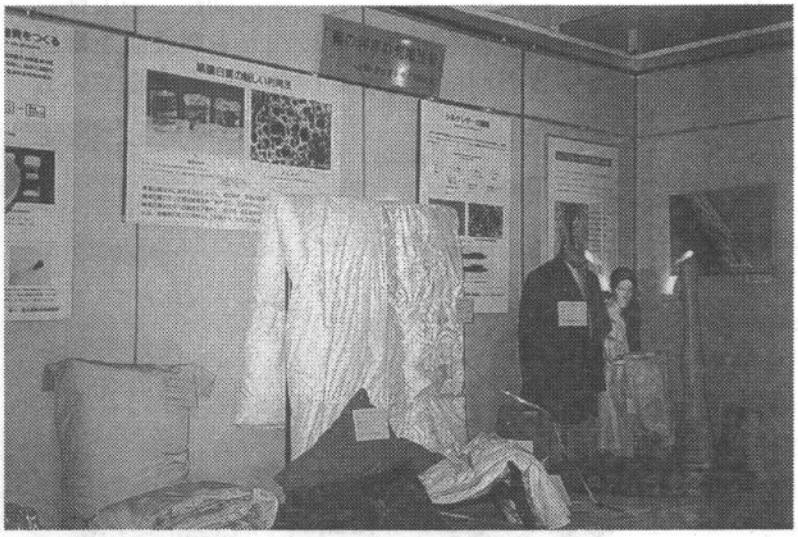
春の特別展「シルクの生活と文化」を開催

東京農工大学工学部附属繊維博物館

去る５月21日から25日までの間「シルクの生活と文化展」が開催されました。

今回は、農林水産省蚕糸・昆虫農業技術研究所、(財)大日本蚕糸会蚕糸科学研究所及び横浜シルク博物館からの協賛をはじめ学内外の多数の方々からの協力を得て、生活の部では、蚕から最新技術による最終絹製品までを、文化の部では、本学の歴史、蚕織錦絵等約500点を展示しました。総入場者数は1,635名にも上り、成功裡に終了しました。

さらに、当館友の会サークル「絹研究会」による生糸や紬糸等の製造実演及び当展運営委員長である重松正矩氏（農学博士）による記念講演会を開催し、講演会には約150名の参加者が訪れ会場があふれかえる盛況ぶりでした。

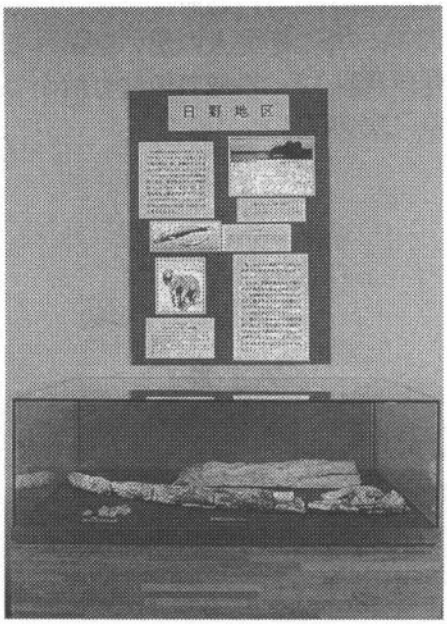


（写真は最新技術による絹製品の展示風景）

今年度の活動と入館者層

羽村市郷土博物館

当館は常設展示を一新し、平成９年４月１日から公開を始めた。実物資料に加えて模型やグラフィックパネルなどを活用することによって視覚的な表現に努めている。



また、このような中、開館13年目の10月12日に入館者が50万人を突破した。１年間の入館者数は約４万人、現在はその内約３分の１が小学校の団体である。一時期子供の減少もあって入館者が減少したが、今年度は企画展や秋の遠足シーズンを中心に増加となっている。

今年の企画展の中で特に好評を得たのは、「きもののひな形」と「大昔の羽村」である。前者は、明治時代の和洋裁のひな形の展示である。特に女性から人気が高く、女性教育や裁縫教育、多摩地区での洋服の普及などの視点から、多くの方面からの反響をいただいた。

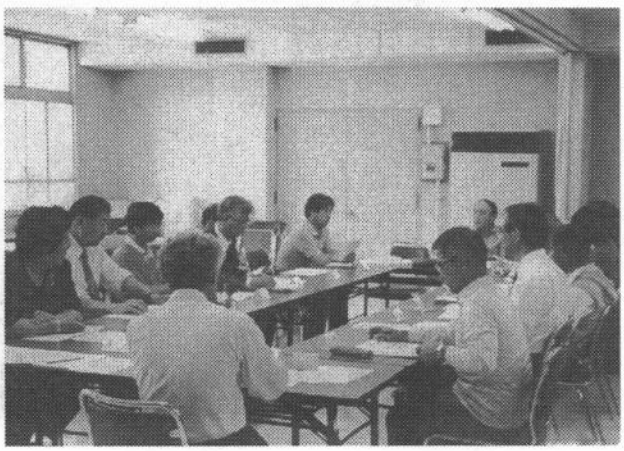
一方、「大昔の羽村」は夏休みにあわせて、青梅市から日野市までの多摩川沿いの上総層群から採集されたアケボノゾウやメタセコイアなどの化石を展示した。大昔（約200万年前とした）の羽村のイメージは、写真やイラストなどのパネルで示した。当館は歴史系の展示に偏りがちだったが、今回は他館の協力を得て新たな客層の開拓をすることができた。職員が少数の館では対応できるテーマが限られがちだが、近隣の博物館同士の協力体制を深めることによって互いに補いあう可能性を確認できた企画展であった。

学校との連携

東京都高尾自然科学博物館

当館では学校との連携を深めるために教員との懇談会を実施した。６月５日、15人の教員の参加を得て３時間にわたり「学校と博物館」について自由な意見の交換を行なった。この時の学校側のもつ事情についての意見の一端をとりあげてみよう。

先ず、時間がない、１日がかりになるという授業の進行にかかわる問題がある。そして次に引率をどうするかということである。父母の理解、引率者の確保、交通手段の選択その利用の仕方など心配は尽きないようである。また、学校は博物館を理解していない。実際に館を利用するに当たっても、子どもに注意事項や禁止事項を多く発することになり、自由に利用できないのが実態であるという意見には、相互の理解不足を痛感せざるを得ない。とにかく利用の仕方が分らないなど、学校教育への位置付けに学校が苦慮していることも事実である。これについては当館でも、学校支援活動について検討に入ったところである。今後とも懇談会を継続して学校の期待に応えていきたいと考えている。



北村西望没後10年にあたって

東京都井の頭自然文化園

井の頭自然文化園では、当園彫刻園ゆかりの彫刻家・北村西望の没後10年にあたって、彫刻に関する催物・ＰＲを強化実施しました。

北村西望は、明治、大正、昭和にわたって活躍した日本を代表する彫刻家であり、長崎平和祈念像の制作者として知られています。井の頭自然文化園では、寄贈を受けた西望の作品700余点を維持管理するとともに、そのうち約240点を彫刻園にて展示しています。本年は、西望が没した1987年３月４日から数え10年目であり、西望とその事績を忍ぶ機会として、彫刻園や彫刻文化の普及に関する事業に力を入れることとなりました。

まず３月20日には、リサイクルをテーマに、「親子で楽しむ彫刻教室・空き缶から鋳造するアルミのアクセサリー」を開催。空き缶を炉で溶かし、メダル型アクセサリーをつくる催物に、13組29人の参加がありました。

６月８日(日)には、彫刻家であり西望の助手であった柳澤飛鳥先生による「西望彫刻ガイドツアー」を開催。西望後期のものを中心に、作品を鑑賞しながらの解説をお楽しみいただきました。午前・午後の２本立てで、計27人の参加がありました。

８月17・24日(日)の２日間、同じく柳澤飛鳥先生による「親子で楽しむ彫刻教室・ＦＲＰでブロンズ風レリーフを作る」を開催しました。強化プラスチックを使ったレリーフ製作に、小学生とその保護者９組18人の参加がありました。

10月10日（体育の日）には、３月と同様「親子で楽しむ彫刻教室・空き缶から鋳造するアルミのアクセサリー」を開催。12組27人の参加がありました。

11月24日（勤労感謝の日）には碌山美術館より学芸員の千田敬一先生をお招きして「日本のロダニズムと北村西望」と題した講演会を開催しました。若き日の西望を魅了したロダニズムについてのお話に、44人の参加がありました。

ＰＲ面では、「長崎平和祈念像」「あくび」をモチーフにしたポスター２種類を製作し、全国の博物館施設に送付、京王線の各駅にも掲出していただきました。

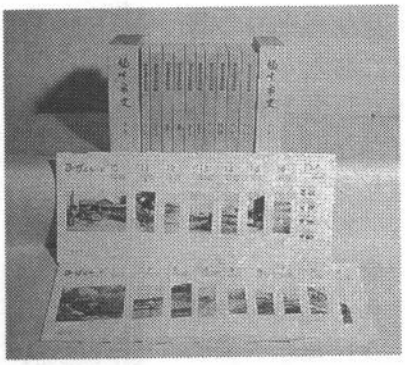
彫刻園は、自然文化園の動物園としてのイメージのせいか認知度がいまひとつでしたが、自然文化園来園者に対する利用者比率も漸増の傾向にあり、このような普及活動の成果は着実に上がってきているといえるでしょう。

福生市史普及版の製作

福生市郷土資料室

平成９、10年度の二か年事業として市史普及版の製作に取り組んでいます。当市の市史編纂事業は、市制20周年記念として昭和58年度に開始し、市史本編上・下２巻、資料編10集、研究誌17集を刊行して平成７年度に事業を終了しました。終了後、刊行物の普及と管理、収集資料（古文書の複写マイクロフィルム）の保存と活用が本庁部局から教育委員会へ移管され、８年度から郷土資料室において市史情報の提供、刊行物の頒布、普及事業（市史を読む会、見学会）などを開催しています。

市史普及版は本編をベースに最新の成果を加味し、ハンディな体裁のものを作ろうと作業を進めています。９年度は執筆、編集を事業委託し、10年度に印刷・製本を行い刊行する予定です。



たてもの園1995

江戸東京たてもの園

江戸東京たてもの園では、秋から冬にかけて復元建造物の新規公開や普及事業などで、賑わいを見せています。その中で、今年度の事業のいくつかを紹介します。復元建造物の新規公開では、10月10日に網島家を公開しました。網島家は一般的に「広間型」と呼ばれる間取りの民家です。当園に復元されている茅葺き民家の中では、建築年が最も古く、江戸時代中期と推定されます。

また、来年２月末には、日本建築におけるモダニズム運動を主導した堀口捨己が、設計した住宅である小出邸を公開する予定です。当時ヨーロッパで流行していたデザインと、日本の伝統的な造形を折衷したつくりになっています。

その他、宇野家の茶室である会水庵、伝統工芸の場として復元する植村邸など、今年度末竣工を目標に準備を進めています。

今年度のこれからの普及事業としては、11月の下町の大道芸に引き続き、１月18日、２月15日、３月15日に炉端の昔がたりを実施します。現代の「語り部」瓜生喬が、信州の民話を語ります。

今年度の活動から

～企画写真展について～

あきる野市五日市郷土館

今年度の活動の中から、企画写真展について紹介したいと思います。

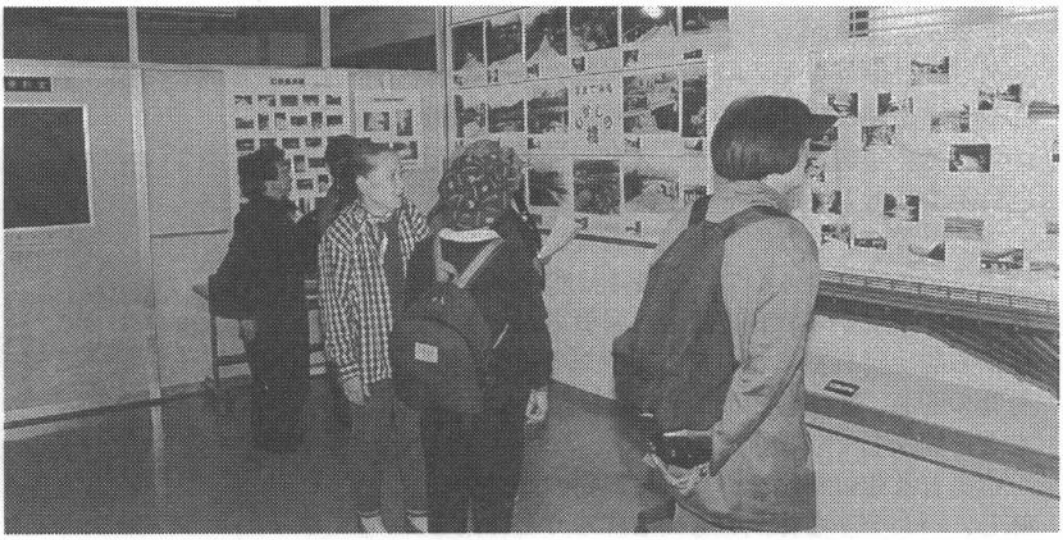
五日市郷土館では以前からあきる野市内の貴重な写真や古い写真の収集に心掛けてきました。これら館で収集してきた写真資料を市民の方に公開して、地域の歴史を知ってもらう一つの契機になればと考え、写真展を企画しました。

企画写真展は、五日市郷土館２階の写真パネル展示スペースを利用して、あきる野市の自然、昔の風景や町並み、産業や生活の様子など、概ね３カ月間、各回ごとにテーマを設けて開催しています。今年度は、「秋川流域の野鳥」「写真で見る昔の橋」「写真で見る昔の山仕事」を開催しました。

企画写真展の開催にあたっては、単に写真の羅列にならないように配慮しました。例えば「写真で見る昔の橋」では、展示写真と比較できるように現在の橋の写真や市内の昔の橋の模型などを展示したり、市内の橋についての簡単なマップを作成し配付するなど、各回のテーマに関連した資料の展示や配付などもあわせて行いました。

また、広報を通じての企画写真展のＰＲに際して、テーマに関連した写真の提供を市民の方に呼びかけを行い、写真資料がより充実するようにも努めています。

今後も、市民の方にあきる野市内の歴史・自然・民俗などを理解してもらうための、一つの契機として継続して企画写真展を開催していきたいと考えています。



年中行事について

清瀬市郷土博物館

今年の始めのことであるが、市の広報担当者から「まゆ玉をしているお宅を取材したいのだが紹介してほしい。」との依頼があった。さっそく心当たりの旧家数件に問い合わせてみたが、答えはいずれも「何年か前まではやっていたが、今は小さい枝で作って玄関に飾る程度である。」とのことであった。比較的厳格に年中行事を実行していると思われるお宅でも瞬く間に簡略化している。当主の代替わりや生活様式の変化などによりこれらは早晩消失していくのだろう。

ところで当館では「博物館年中行事」と称して年に数回年中行事や農作業を再現しており、その指導を地元の皆さんにお願いしている。「まゆ玉」も実施しているが、開館以来十二年を経過し、協力していただいている婦人会の顔ぶれも入れ替わりがあり、初めてするという若い方も現れて来る。婚家が農家であっても諸般の事情により伝承されにくいのが実情である。「家」から遊離した博物館という「外」の場では、どの方も物珍しさも手伝ってか興味深く事に当たってくれた。

各家々の特徴を出し、家族の中で楽しんだ年中行事であったが、昨今は現実のくらしに即していない行事は継続し難い。「粟穂・稗穂」などは今や博物館でしかみられない行事である。家の制度が失われつつある現在、外＝博物館が皆が集い伝えあう場としての役割を果たし始めている。

常設展示室の活性化

府中市郷土の森博物館

府中市郷土の森博物館も1997年４月をもって、満11年を迎え、新たな活動に取り組むべき時期にきている。最も大きな課題は、常設展示の更新である。とはいうものの、数年前から話題にすれども、なかなか前に進んでくれない。

されど、常設展示は博物館の顔である。そこに開館以来の資料収集と調査・研究の成果を何とか反映できないものか、いや、しなければいけない。そしてまた、いつ来ても同じ展示ではリピーターが来るはずもない。常に新しい情報を提供する展示室にしたい。

そこで、「ミニ展」登場。常設展示室内でさわやかな展示会を行うことにした。既に、「やがて、学校にも戦争が…」（８～９月）、「大田蜀山人と玉川巡視」（10～12月）、「江戸時代、是政村で経典が埋められた」（11～２月）を実施。現行の常設展示では触れられなかったテーマや、特別展・企画展ほど話題を広げるのは難しいけれどちょっと面白い、あるいは今が旬などなど、これからも年３～４回のペースで開催する予定である。

何度でも楽しめる常設展示室をめざして！

収蔵品展『トウロマチ(灯籠祭)の世界』

武蔵村山市立歴史民俗資料館

昭和30年代まで市内各地で行われていたトウロマチ（灯籠祭）の様子を紹介する展示を6月29日から11月25日まで実施した。

この灯籠は一般に地口行灯と呼ばれ、駄洒落入りの絵が描かれている。

地域の子供達が共同で灯籠を飾る主要な行事であった。

恵比寿大根喰（エビスダイコク）

広報課移管フィルムの保存と活用

調布市郷土博物館

1955年4月1日、調布市が誕生し、その3か月後に「調布市報」が創刊。以来、市報や報道用に、広報課で撮影した写真は膨大な量に達しています。このうち、1958年から1991年までのモノクロのネガフィルム約8,000本（200,000コマ）が、現在当館に収蔵されています。内容についての簡単なリストはありましたが、撮影年月日や場所の不明なものも多く、市報の縮刷版や新聞記事の切抜きなどを参考に、それを特定する作業が延300日間かけて行なわれ、担当者は途中で老眼鏡を作り替えるはめになりました。整理後、市制40周年記念展や学校の記念誌の作成に活用しています。現在、市の刊行物はすべて登録されていますが、その作成のために撮影された写真を保存するルールやシステム作りは当館にとっても今後の課題です。

常設展示の模様替え

立川市歴史民俗資料館

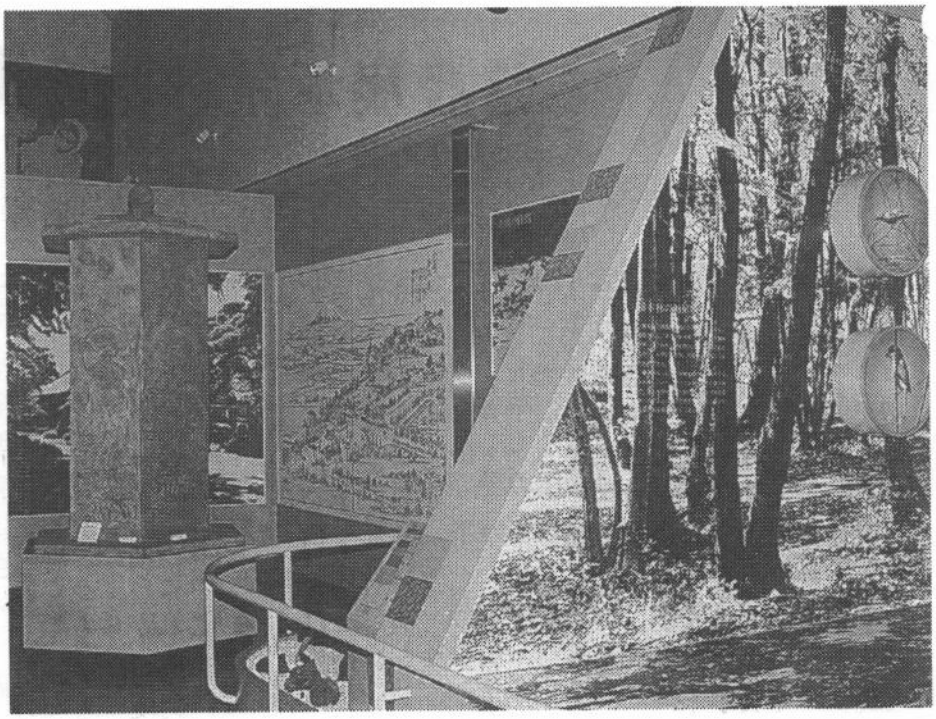
開館13年目を迎えた当館では、ここで初めて常設展示の一部改修に取り組む。

計画は、今年度構想、来年度実施とし、現在業者とそのイメージ作りにあたっている。

主な改修点は、展示室内中央の島部を見通しのよい構造にすることと、地図や年表類に最新情報を追加することである。

これについて職員側からは、改修後においても新情報の追加修正が容易であること、既製品等による交換や修理が可能なことなど、職員の手でも修正や調整ができるような機器構成及び展示装置の導入をもとめている。

近年の情勢を考えると、大規模な改修がすぐに実現するとは思えない。したがって、奇抜な最新技術の導入より、丈夫で修理や調整がラクで、職員でも手直しできるような展示にしたいと考えているからである。



倉にみる生活文化

八王子市郷土資料館

当館では、数年来、名主家などに残された資料を中心に、ムラの暮らしぶりを解明しようとする試みを行ってきた。今年度の特別展「八王子宿周辺の名主たち」は、一連の名主家資料調査の成果である。今回の特別展の鍵を握っていたのは、名主家の「倉」であった。当たり前のことかもしれないが、倉が古文書や調度品類の散逸を防ぎ、風雨や虫・鼠害から守ってくれたからこそ、今、展示も出来るのである。また、一つの倉の持つ情報量ははかりしれず、倉それ自体が極めて重要な資料であることを、改めて考えさせられた。

無論、名主家の倉だけが重要なのではない。当館では近年、市内に残る講中膳椀収納倉庫の調査を行っている。講中膳椀とは、講中などの近隣組織の単位で共同所有している、人寄せの膳椀類のことである。講中膳椀の保管方法には倉のある家に預ける他、専用の倉を建てる場合が多い。このようなものは多摩全域に広くみられ、すでに羽村市や福生市・国立市・多摩市などから、詳細な報告が出されている。

多摩地域に限っていえば、講中膳椀が成立したのは、早いところで幕末、一般には明治頃といわれている。そして冠婚葬祭を式場で行うようになる昭和30～40年代には、ほとんど使用されなくなっている。つまり講中膳椀は、漆器を用いた本膳形式の宴席をもうけることが一般化し、冠婚葬祭関連産業がそれらに取って代わるまでの、限られた時代の産物であった。講中膳椀とその収納倉庫は、地域社会が、近世から近代にかけて変容していく過程で生まれたとはいえ、すぐれた民俗資料であると同時に、近代の生活文化資料といえるのである。

当館では、八王子ニュータウン開発地区での緊急調査を1994・95年度に行ったほか、市内の講中膳椀収納倉庫の所在確認調査を進めている。他市町村の事例も参考にさせていただきたく、情報収集にご協力をお願いする次第である。

博物館事業としての調査資料の活用

―町方文書調査を通して―

青梅市郷土博物館

現在、青梅市の行政区域は、江戸期の旧三田領１町１山34カ村である。特に青梅町は、その核となる渓口集落交易都市として陣屋が置かれ、青梅街道馬継の宿駅であった。この青梅町の文書の収集・調査は村方文書に比較して遅れ、考察するための資料に乏しかった。

当館では、青梅町関係の文書の概要を調査目録として作成する「町方文書調査」を平成３年度より開始し、今年で７年目となった。

この事業は、町方文書調査会（会長　齋藤愼一氏）に委託し、市域の自主グループの青梅古文書研究会と青梅生活文化研究会の女性達を中心として、調査期間中、週１日のペースで調査文書を整理・分類し目録を作成するのである。約６年間で有力商家等６軒の文書合計１万５千点余を調査し、現在、７軒目を整理中である。

一方、平成７・８年度には、調査した文書から『商家の生活・文化』というテーマをたてて資料を選び、「郷土博物館講座―史料を通して歴史を知る―」の教材として使用し、調査の経過報告もあわせて行なった。この文書読解の実体験とその資料提供という市民への働きかけを意図した講座には多くの参加者があり、好反響を得た。敬遠されがちな古文書をいかした博物館事業として新しい試みであったと思う。

調査６年目の平成８年度には、企画展「青梅の菓子屋―お菓子作りの道具―」で、平成３・６年度に調査した菓子仕入帳や菓子袋などを収蔵民具と関連して展示するなど、町方文書調査によって発見された資料を市民の身近な博物館展示事業として活用していくように努力した。

また、来年度に開催予定の特別展「青梅宿」（仮題）では、更に６年間におよぶ「町方文書調査」の成果を全体的にとらえ、青梅町の変遷の様相を民具や古文書を使って、来館者の方々が身近に見て、読んで、楽しく考えることができる展示を立案計画中である。

近距離望遠鏡の設置

町田市立博物館

町田市立博物館では今年度、館蔵品展を４回、企画展を３回開催しました。新たな試みといえば近距離望遠鏡の設置が上げられます。そのきっかけは、10月28日から11月30日まで開催した「ミニチュア展」です。この展覧会は、古くは縄文土器から新しくは現代のドールハウスまで、古今東西のミニチュアを480点近く集めました。小さく美しいもの、かわいらしいものなら小さなお子さまから年配の方まで家族で楽しんでいただけるだろうと企画したものです。ところが、こうしたミニチュアは手にとって鑑賞されることが多く、またそうしないと細部が見てとれないという事情があり、ガラス越しの展示の限界が問題となりました。そのとき、大阪市立東洋陶磁美術館の学芸課より近距離望遠鏡(単眼鏡)をご教示いただきました。４倍の拡大率のもの十数基を設置することにしました。高さ60センチ、縦横25センチほどの木製の台を２メートルほどの間隔で設置し、各台ごとに２基を1.5メートルほどの細い鎖で固定しました。肉眼で鑑賞するということと細部を細かく見るということを来館者各自が組み合わせることができるという点が好評でした。

当館は開館25年という旧式の構造を持った館であり、来館者は展示されているものをひたすら見るという、受け身の態度に終始せざるを得ないのが難点です。単眼鏡で覗くという単純な行為であれ、作品に働きかけることができたためか、480点という展示点数の多さにもかかわらず、終りまで飽きずにご覧になった方が多かったようです。この単眼鏡は続く「大津絵展」でも設置され、照明の暗い東洋絵画の細部鑑賞に有効であることが確められました。そのほか、当館所蔵のガラスなど、作品の細かな部分を観察したい来館者は多いようで、予想以上に用途が広がるものと思われます。

編　集　後　記

東京都三多摩公立博物館協議会は、昨年４月30日に平成９年度定期総会（青梅市教育センター）を開催し、その際、都教育庁文化課の原眞麻子氏に講演をお願いし、「イギリス及びアメリカにおける博物館の展示・教育活動の展開」についてお話しいただきました。さらに同８月19日に平成９年度第１回協議会（調布市東部公民館）を開催し、「博物館及び資料の消毒・燻蒸」について、各館の現状や課題を話し合いました。

本号では、この２つのテーマを特集にして、前者は原眞麻子氏に、後者は東京国立文化財研究所の木川りか氏に執筆をお願いしました。両氏とも、これからの博物館が取り組むべき課題について、研修や会議による海外からの新しい情報を提供していただきました。また、研究者としての意見をまじえながら今後の問題についても提起していただきました。

三博協会員館には、「最近取り組んでいる特色ある活動」「ここ１年の話題」「活動報告」「そのほか」のテーマで原稿の執筆を依頼し、各館から様々な情報をお寄せいただきました。

ミュージアム多摩　No.19

発行：東京都三多摩公立博物館協議会
会長　調布市郷土博物館長　長田康正
〒182-0026 調布市小島町３－26－２
電話 0424-81-7656

編集委員：青梅市郷土博物館
八王子市郷土資料館
府中市郷土の森博物館
町田市立博物館